

## 鏡（村上春樹）

田尻 愛里紗、佐々木 智美、村上 公崇、河合 遼太

## 一 作者と作品について

一九四九年一月二日、京都市伏見区に誕生。生まれてまもなく兵庫県西宮市に転居する。兵庫県立神戸高等学校卒業のち、早稲田大学第一文芸学部に入學する。二十二歳にして、大学の友人であった陽子氏と学生結婚をする。結婚に踏み切った理由は、同棲が嫌であったことと、自分だけの世界を持ちたいという願望があったことからだとする。二十五歳、国分寺にジャズ喫茶「ビーター・キャット」を開店する。その翌年に早稲田大学第一文芸学部を卒業する。在學七年。一九七九年、三十歳のときに、小説を書くことを思いつき、経営のかたわら執筆に没頭する。同年六月、『風の歌を聴け』で第二十二回群像新入文学賞を受賞、作家デビューを果たす。デビュー当初から平易で親しみやすい文章を心がけているという。リズムを重視しており、その背景にはかつてジャズ喫茶を経営していたことがあると語っている。独特な隠喩を巧みに操っていることも、村上春樹の作品の特徴とされている。主な著書に『ノルウェイの森』『ダンス・ダンス・ダンス』『スプラウトニクの恋人』などがある。

「鏡」は、『トレフル』一九八三年二月号に掲載され、短編小説集『カングルー日和』（平凡社）に収録された。一九九一年一月刊行の『村上春樹全作品 1979～1989』⑤（講談社）に収録される際、加筆がなされ

た。教科書に掲載されたものは、『村上春樹全作品 1979～1989』⑤による。

鏡という作品については、どうしてもかには僕には想像もつかないのだが、国語の教科書に入れたという申し出が二件もあった。恥ずかしいのでお断りしたけれど、それはそれとして僕はどうも宿命的に鏡とか双子とかダブルとか

にすぐく惹かれるみたいである。どうしてかはわからない。

（『村上春樹全作品 1979～1989』⑤付録「自作を語る」より）

## 二 叙述について

さつきからずっとみんなの体験談を聞いてるとね、そういったタイプの話にはいくつかのパターンがあるんじゃないかって気がするんだよ。

「さつきから」と言う言葉により、冒頭にも関わらず過去にあったことを示し、読者の興味を惹いている。「ずっと」と言うことで時間の長さを示し、少なくとも「みんな」が四、五人はいることを暗に示し



ている。「〜とね」や「〜だよ」と言う語尾により、改まった場ではなく、「みんな」がある程度知り合っている仲であることがわかる。「〜じゃないか」と言う言葉はこれを語っている人物が「みんな」に対してやや上から目線であることを思わせる。この考察に対し、上から目線ではないのではないかとという意見をいただいたが、後に語り手が自分の生きた時代の説明や聞き手に対して「十八、十九の頃なんてまったく怖いもの知らずだもんね。」と語っていることからこの語り手は周りの聞き手よりも年上であることがわかる。そのため上から目線であると書いたが、この文だけでは確かに語り手と読み手の年齢差などはわからないため、指摘のように推量でとることも出来る。「〜気がする」という言葉は語調を柔らかくし、意見を明晰していないような印象を与えるが、それにより却って反論を許さない雰囲気を作り出している。

まずひとつはこちらに生の世界があつて、あちらに死の世界があつて、それが何かの力によってどこかでクロスするっていうタイプの話だね。「まず」と言う言葉により、これからいくつか例示するうちのひとつを挙げるということを示している。「こちら」「あちら」と言う言葉により、この語り手は生と死を区別して考えていることがわかる。「〜だね」という文末は聞き手に対して教えているような印象を与える。また芝居じみた言い回しになる。

たとえば幽霊とか、そういうの。

前文の例を挙げ、聞き手側が理解しやすいようにしている。また、「そういうの」の前に読点を打っていることで聞き手の注目を集めている。

それからもうひとつは三次元的な常識を超えたある種の現象や能力が存在するっていうことだね。

「それから」と言う言葉はその前の話題に対して、これからさらに付け加えていくという効果を持つ。「三次元的な」というのは自分たちが実際に生きている現実のことを示しているが、次元の違う話をしてることを意識させるためにこのような言い方をしているのだと思われる。「ある種の現象や能力」というのは前の「常識を超えた」を受けており、自分たちでは理解できないような印象を持たせている。

で、そういったのを総合してみるとさ、みんなどちらか一方の分野だけを集中して経験しているような気がするんだな。

「で」と言う言葉はそこまでの話を一度まとめるという合図になる。「みんな」と冒頭と同じ言葉を使うことで語り手が話を聞いた結果そう感じているということを示している。「総合」「気がする」を使用することで自分の意見に対する反論を止めている。

つまりさ、幽霊を見ている人はしばしば幽霊は見るんだけど、虫の知らせを感じることはまずないみたいだし、虫の知らせをよく体験する人は幽霊ってみないんだね。

「つまりさ」と言う言葉は前文の説明を始める合図になる。「見ている」「しばしば」により一度だけ幽霊を見たのではなく、何度か、もしくは日常的に幽霊を見ることを示している。「みたい」と言うことで自分の経験からの推測ではなく、あくまで他人から聞いた話をまとめたということを表している。また「幽霊」や「虫の知らせ」を何度も書

いているのは「三次元的な常識を超えたもの」を読者が想像しやすくする効果を持つていると言える。更に、この文ではないが、「超能力」や「予知」も同じような効果を持つていると言える。

何となくそういう感じがするんだ。

自分の考えに確証はないが、自分がそう感じていることを示している。また確証はなくとも強く感じていることを示している。

それから、もちろんどちらの分野にも適さないって人もいる。

「もちろん」はそれ以降の言葉に対する反論を許さず、自分の意見を主張する効果を持つている。「適さない」とあることから、語り手はそれまでの類の話は資質によるものだと考えていることがわかる。

僕はもう三十何年生きているけれど、幽霊なんて一度も見たことがない。

「もう」とあることから、語り手は自分が生きてきた年月を長いと感じており、また、「幽霊なんて」と言っているため、幽霊の存在に対して否定的であることがわかる。

二人の友だちと一緒にエレベーターに乗っていて、彼らが幽霊を見ていながら、僕はまったく気づかなかつたというところもある。

前文を受けて、自分が幽霊や虫の知らせと言った特異な現象に関わったことがないことを更に強調している。またそういう幽霊などの特異な現象に対して否定的であることも示されている。

我々三人きりだった。

それまでの聞き手に対して語りかけるような口調から、ただ事実を述べるような口調に変化させることで三人以外には誰もいなかったことを訴えている。

それにその二人もわざわざ僕をかつぐようなタイプの友だちじゃないんだ。

「それに」とあることから前文までのエレベーターの中には自分たち三人しか乗っていないかったことを聞き手及び読者に意識させている。また「わざわざ」と言う言葉は語り手の友人二人が実際に幽霊を見ており、語り手をだまそうとする人物ではないことを認識させる手助けになっている。「ないんだ」という言葉で終わらせることでその話題をここで終わらせるといふ合図になる。

まあそれはそれですごく気味の悪い体験だったけど、それにしても僕が幽霊を見てないということに代わりはない。

「まあ」や「それはそれで」とあることからこれから話すことにそれほどほどの重要性を置いていないことがわかる。「それにしても」と言う言葉でこれから話す内容に対し、注目を集めている。

なんというか、実に散文的な人生だよな。

「なんというか」でそれまで自分が語った内容を整理し、まとめようとしていることがわかる。また、「散文的な人生」とあることから、語り手は幽霊や超能力を特異なものとして見ており、それに関わっていない自分は平凡なものであるとまとめている。「散文的」とは詩情に

乏しく面白味のない様子を指す。また、「だよな」は「だよ」や「なんだよな」などに対し、自分の主張だけでなく、相手への確認のような意味を持っている。

でも僕にも一度だけ、たったの一度だけ、心の底から怖いと思ったことがある。

「にも」とあることでそれまでに自分以外の人が自分と同じような体験をしたことを示している。また「一度だけ」を繰り返すことにより、自分が心の底から怖いと思ったのはその一回だけであること、またその一回が非常に印象に残っていることがわかる。「心の底から」とつけたことによりその体験が自分にとって恐怖するものであったことを印象付け、またそれまであまり強い語を使わなかったこともあり、その話に対して読者の興味を引いている。

口に出すことさえ怖かったんだ。

前文の「これまで誰にも話したことはない」の理由説明になっており、「さえ」とつけることでそれほど怖かったということをより印象付けている。また「話す」ではなく、「口に出す」となっていることから順序立てた話として誰かに話すことだけでなく、ふと自分で言うだけでもだめなのではないかという語り手の心情が読み取れ、その出来事がよほど語り手にとって恐怖を感じるものであったということがわかる。

口に出しちゃうとまた同じことが起こるんじゃないかって気がしてね、だからずっと黙ってた。

「口に出すと同じ事が起こる」というのは語り手の第六感にあたるのではないかというように思われるが、ここでの第六感はいくまで何となく感じているだけであって語り手の言う「虫の知らせ」とは別物に扱われている。ここでの「黙る」は「口に出す」に対する「黙っている」であるため、単に人に話さないというだけでなく、より厳密に秘密にしていたという意味合いを持つ。

でも今夜はみんなが順番にそれぞれ怖い体験談を聞かせてくれたわけだし、主人である僕が最後に何も話さずに場を閉じるというわけにもいかない。

「でも」とあり、この話はあくまで黙っていたいものだが、しぶしぶ話そうという意思が読み取れる。「それぞれ」とあることから、その場にいる「みんな」全員が怖い体験談を話し、またその内容が違ったものであることがわかる。「くれた」と言う言葉から語り手が「みんな」に対してある程度の感謝の気持ちを持っていることがわかる。「主人である僕」とあり、この「怖い体験談」を話し合う場を作った、もしくは作り出す際の中心役であることがわかる。また、「主人」を「しゅじん」ではなく、「ホスト」と読ませることににより、単にその家の持ち主ということだけでなく、その場を作り出した人、もしくはその一人であるということが読み取れる。「最後に」からもうすでにその場にいる語り手以外の人物は全員話し終えており、語り手がトリを務める立ち位置の人物であることがわかる。「場を閉じる」ということからこの話し合いは突発的に行われたものではなく、事前に取り決めがなされ、準備をした結果開かれたものであるということが読み取れる。「できない」ではなく「わけにはいかない」とあることから、語り手の能力不

足で行えないのではなく、あくまで「何も話さず場を閉じる」ことが道理に反しているためにできないということがわかる。

いや、いいよ、拍手はよしてくれよ。

前文とこの文の間に「拍手」という相手を歓迎する意味合いの行為がなされていることがわかり、この語り手が話すということがその場にいる他の人たちにとって実質的にせよ、形式的にせよ、歓迎されることであることがわかる。また拍手は自分一人以外に人がいない状態で行うことではないため、語り手以外のその他大勢がいることを読者に改めて認識させる効果がある。

そんな大した話でもないんだからさ。

「そんな」とあることからその場にいる聞き手が期待するほどの話ではないが、ある程度の価値を持つ話であることが分かる。文末に「さ」と入れることで語調を柔らかくし、今から自分のする話の価値をぼやかしている。

前にも言ったように幽霊も出てこないし、超能力もない。

「前にも言ったように」は、三段落前に言った事を指している。「〜ないし、〜もない」と書くことで、そういった常識を超えた経験が一切出てこないという事を示している。また、「前にも言ったように」は、正式な書き言葉であるのに対して、「〜し」は話し言葉。

僕が思っているほど怖い話じゃなくて、なんだということになっちゃうかもしれない。

「僕が思っているほど」は、二段落前より、「心の底から怖いと思」うほどだとわかる。「なんだ」は、「みんな」の落胆する気持ちを代弁する言葉。あまり期待をしないで欲しいという思いの表れ。

ま、それはそれでいい。

「ま」は、「まあ」と同じ意味で使われ、ここでは「とにかく」と同義。話し言葉の「ま」を使うことで主人公の話に臨場感を持たせている。また、「まあ」ではなく、「ま」と短くすることで、後を引きずらず、すっぱりと話を区切る印象を受ける。「それはそれでいい」から、「みんな」がどう思おうと良いという姿勢が伺える。

とにかく話すよ。

「とにかく」から、細かい事はおいておいて、他に移ろうとしている。前置きが長くなってしまったと感じたのか。

僕が高校を出たのは六〇年代末の例の一連の紛争の頃でね、なにかといえれば体制打破という時代だった。

「例の」から、口にはつきり出さずとも、共通の認識としてある事がわかる。また、口に出すことが憚られる、あまりよくない出来事であると推測できる。「僕が」と、主語を自分に限定し、「〜という時代だった」と言うことで、主人公は「みんな」よりも上の年齢であると推測できる。

僕もまあそんな波に呑み込まれた一人で、大学に進むことを拒否して、何年間か肉体労働をしながら日本中をさまよってたんだ。



この「まあ」は、少しためらいを含んでいる。言いづらい、あまり自慢できない過去か。また、「波に呑み込まれた一人」という表現から、紛争は大きな時代の流れだったことがわかる。「何年間か」ということは、数年後にはそういった生活をやめることになったのだろう。

そういうのが正しい生き方だと思ってた。

「〜ってた」から、今はそれが正しい生き方だと思っていないことがわかる。また、「正しい生き方」という表現から、当時の若い「僕」は、強い信念を持ってこの生き方を貫き通そうとしていたと思われる。

ま、若気のいたりというかね。

この「ま」は、総括する表現か。「若気のいたり」からは、もう主人公は若くないという事と、無分別だった昔の自分を懐かしむ気持ち、少し恥ずかしく思う気持ちが感じ取れる。「というかね」という語尾からも、言い方を迷う気恥ずかしさが感じられる。

それが正しかったとか間違っていたとかじゃなくて、もう一度人生をやりなおすとしても、たぶん同じことをやっているだろうね。

それほど今の「僕」にとってはかけがえのない時間だったという事か。「若気のいたり」と言いつつも、後悔はしていない様子が伺える。

そういうもんだよ。

詳しく説明することを放棄し、「みんな」に理解されなくてもいいという姿勢が伺える。これはそういった「僕」のような経験が「みんな」に無いからであり、「僕」はやはり「みんな」よりも数年かそれ以上上

であると想定できる。

新潟の小さな町のある中学校さ。

「新潟の」とわざわざ言うところから、主人公たちが居るのは新潟ではないとわかる。また、それに続く「小さな町」「ある中学校」から、誰からも注目されないような辺境の場所にある、小さな中学校という印象を受ける。

昼間は用務員室で寝かせてもらってさ、夜中になってから全校舎を二回チェックすればいいだけだからね。

「〜してさ、〜するだけ」というように、「さ」が入ることによって、一拍置いたようになる。口に出してみても「さ」で一拍置いた方が言いやすいことから、口調を整える意図か。また、一拍置くことによつて、「〜して、〜するだけ」というよりも、昼間と夜中の時間帯の区別が一文の中で明確化するのではないか。

夜中に一人きりというのは悪くなかったね。

「よかったね」ではなく、「悪くなかった」から、そこまでの喜びを見いだしていない。そこまで楽しくないが、人目を気にせず自由に過ごせてよかったと感じている。

いや、ちっとも怖くなんてないさ。

前文に誰からの質問もないのに、「いや」と否定しているのは、「みんな」の気持ちを先に汲みとって言った言葉だと推測できる。読者の気持ちの代弁もあるだろう。または文章中にない所で「みんな」との

やり取りがあつたと考えるべきか。

だって十八、十九の頃なんてまったく怖いもの知らずだもんね。

「くだもんね」から、「みんな」に同意を求めていると考えられる。

「みんな」は、十八、十九か、それより上。「放浪の二年めの秋」などで、「僕」は十九歳のころだと推測できる。

君たちは中学校の夜警なんてしたことないだろうから手順を一応説明しておく、見回りは午後の九時と午前の三時に一回ずつやるんだ。

「君たち」は、「中学校の夜警なんてしたことない」という言葉から、「僕」とは違った人生を歩む若者か。高校卒業後そのまま大学に入学生た者とも考えられる。

それに音楽室とか裁縫室とか美術室、それに職員室やら校長室なんかがある。

「くやらくなんかがある」という表現から、それ以外の倉庫や空き教室と言った施設も色々あるのだろうと推測できる。

それだけをざっと見回るわけさ。

「ざっと」と「ざつと」を比べてみると、「ざつと見回る」は、素早く見ている印象だが、「ざつと」は、全体を適当に見るという意味を含むように思う。それだけ「僕」にとっては楽な仕事だったという事だろう。

見回るチェック・ポイントは二十くらいあって、歩いてひとつひとつ

それを確かめ、ボールペンでOKサインを用紙に書き込むんだ。

「チェック・ポイント」「ボールペン」「OKサイン」などのカタカナが多く入っている。こうしたカタカナを多用することで、場の雰囲気や和らげる効果を狙ったのではないか。

職員室——OK、実験室——OK、てぐあいだね。

「——」を「OK」の前にいれることで、見回りのポイントに来て、確かめてから書き込んでいる様子が伺える。

もちろん用務員室に寝転んだままOK、OKって書きちゃうこともできる。

ここでは前文と違い、「——」が無いので、ささつと連続して書き込んでいる様子が想像できる。また、「寝転んだまま」という表現から、座ることもせず、我が家のようにくつろぎきっている様子が伺える。

相手が素人なら、たとえ向こうが日本刀の真剣持ってたって別に怖かなかったさ。

前述の「だって十八、十九の頃なんてまったく怖いもの知らずだもんね。」と繋がる。「たとえくだって」から、どんな相手でもひるまない姿勢が伺える。また、この「くさ」は、自分の主張の念押し。本当に怖いもの知らずだったことを伝えようとしている。強い青年の印象を受ける。自慢げにもとれる。

その頃はね。

当時と現在の差があることがわかる。今はどうなのだろうと思わせる。

今なら一目散に逃げるよ、もちろん。

「一目散」から、なりふり構わず、すぐに逃げようとする行為を想像できる。若いころのどっしりと構えた印象とは対照的に、少し滑稽な印象を受ける。また、最後に「もちろん」を持つことで、「もちろん」が強調され、より怖いもの知らずさが薄れている。少しおどけた印象も受ける。

夕方ごろからやけに蚊が多くてね。

この一文に限ったことではないが、「うね」という語尾を用いるなど、聞き手を意識した、語りかけるような文章である。秋も半ばの十月であるにも関わらず、「やけに」蚊が多く、普段とは違う印象を「僕」は感じている。「やけに」は、度を越して程度がはなはましいという意味であるため、「僕」が蚊に対して不快感を抱いていることも推測できる。

それで一晩中ばたんばたんさ。

擬音語の動詞化。夜を通して仕切り戸があらわれて音をたてるほどに、外は風が強かったのだということが分かる。ただあらわれているだけでなく、ばたんばたんを音をたてているのだということ強調している。

僕は用務室に戻って目覚まし時計を三時にあわせてぐっすり眠った。

風は強く、むし暑くて蚊も多いが、それでも「ぐっすり」眠れるほどに、学校におかしな様子はなにもないことが分かる。直前の「変わったことはなにもない」や、その前の「何もかもちゃんとあるべき場

所にあった」という一文からも同じことが分かり、この段落ではとにかく校内に異常がないことを説明している。

三時に時計のベルが鳴った時、僕はなんだかすごく変な気がした。

前段落冒頭の「九時に見回った時には何も起こらなかった。」と対比的である。「なんだか」「気がした」という部分から、自分でもよく分かっているが、何かしらの違和感を覚えている。

体が起きようとする僕の意志を押しとどめているような感じさ。

起きようとする「僕」と、その「体」が異なるものであるような表現をしている。

気のせいと言われればそれまでだけど、うまく体に馴染まない。

違和感を覚えているもの、何によるものなのかが分からないので、自分の考えに確信を持たずにいる。

風はますます強くなって、空気はますます湿っぽくなっていった。

「ますます」という表現を繰り返すことで強調し、少しずつ状況が変化していることが推測される。

戸はひどく混乱した人間が首を振ったり肯いたりするみたいな感じではたんばたん開いたり閉じたりしていた。

音をたてて揺れる戸に、不安を感じる「僕」の心情が表わされている？（肯定、否定が何を表わしているのか分からない。）



なんだか変なたとえだけども、その時は本当にそう感じたんだ。

「その時は」とあることから、この体験談を話している今は、当時とは違う考えを持っているのかもしれないと推測される。

ほんの時たま雲が切れても、すぐにまたまっ暗になってしまおう。

「くしても、……してしまおう」という口調から、そうなるのを厭っていることが推測される。ただ暗いのではなく、「まっ暗」であり、懐中電灯で照らしながら見回りをしている。

その夜はいつもより急ぎ足で廊下を歩いた。

九段落で「夜中に学校で一人きりというのは悪くなかった」「ちっとも怖くなんてないさ」と言っているの、暗い校内が怖いのではないのだろう。しかし、懐中電灯で照らさなければならぬほどにまっ暗であり、歩きづらはずだが、「僕」はいつもより急ぎ足で用務員室へ戻ろうとしている。暗闇ではない別のものに不安、もしくは恐怖を感じている。

そしてそちらにぱっと懐中電灯の光を投げかけた。

前文で木刀を握りなおしたことや、何かが見えた方に向きななおったこと、そして明かりを「ぱっと」「投げかけた」という表現から、「何か」を恐れまいとする「僕」の様子が見て取れる。

つまり——鏡さ。

「——」というようにためること、体験談を聞いている人たちの注意を引いていることが分かる。題名にも用いられている「鏡」が、

ここで初めて出てくる。キーワードとなるだろう。

僕はほっとすると同時に馬鹿馬鹿しくなった。

暗闇で見えたなにかが鏡に映った自分の姿だと気付き、誰かがいたわけではないと安心した。前文の「木刀を握りなおして」という描写や、「幽霊なんて一度も見たことがない」と言っていることから、「僕」はおそらく幽霊がいるなどとは考えていない。怪奇現象が起こるということも予想してはいないと思われる。鏡に映った自分の姿に驚いたということが「馬鹿馬鹿しく」思えたのだろう。

それで鏡の前に立ったまま懐中電灯を下に置き、ポケットから煙草を出して火をつけた。

「馬鹿馬鹿しくなった」ことから、くだらないことで驚いてしまった自分をごまかすために、煙草を吸っている。学校の中で煙草を吸うのは見回りとしてふさわしい行為ではないように思えるが、ただ自分の姿をじっと見るよりは、片手間に煙草を吸う方が不自然でない。物語の中で煙草の存在が出てくるのはここが初めてである。

煙草を吸うためには一旦手が空く必要がある。なので、懐中電灯を下に置くのである。

窓からほんの少しだけ街灯の光が入ってきて、その光は鏡の中にも及んでいた。

一階の長い廊下は真っ暗であるとの記述がある。学校の玄関は暗闇の中にあり、「僕」も懐中電灯を使って歩いてはいたはずである。しかしここで唐突に「街灯の光」が差し込んでくる。街灯の光は、太陽や月

のように雲などにさえぎられたり、時間によって差し込む角度が変わったりはしない。よって、ここでいきなり光が差し込んでくるのは少し不自然であると思える。もしかすると、ここで差し込んでくる光も、これ以降の怪奇現象と一連のものなのかもしれない。

煙草を三回くらいふかしたあとで、急に奇妙なことに気付いた。

「急に」という言葉を持つてくることで、これから始まる奇妙なことについての興味を読者に持たせるようにしている。

つまり、鏡の中の像は僕じゃないんだ。

「つまり」という結論を導き出す語を使ってはいるが、その後の文章は抽象的である。前文で引いた興味を持続させることに成功している。

いや、違うな、正確に言えばもちろんそれは僕なんだ。

「違うな」と口語で否定の言葉を入れることで、語りの臨場感を増すと共に、「僕」が説明に困っていること、説明しづらいと思っていることをうかがわせる。

でもその時ただひとつ僕に理解できたことは、相手が心の底から僕を憎んでいるってことだった。

「鏡の中の像は僕じゃない」と気付いた「僕」だが、なぜそう違うと感じたのかはうまく説明できずにいる。しかし、「でも」と逆接の接続詞で始めた一文だけは理解できたと言う。

まるでまっ暗な海に浮かんだ固い氷山のような憎しみだった。

比喩表現を使うことで、「憎しみ」のイメージをより鮮明なものにしている。村上春樹の作品は比喩表現が豊かであることが特徴の一つとして挙げられるが、この作品では全体的に装飾的な文章は控えめであり、特徴的な比喩表現はそれほど見られない。それによって、ここで使用される比喩表現がより印象的なものとなっている。

だが、なぜ鏡の中の「僕」が「僕」を憎んでいるのかは明らかにされない。理由が明らかにならないことで、より恐怖感がおおられる。

我々は同じようにお互いの姿を眺めていた。

「我々」とは「僕」と「鏡の中の像」のことを指す。「同じように」とあることから、この時点では鏡の中の像は、身体の動きとしてはまだ何も動き出してはいない。

「憎しみ」を理解したということは「僕」と「鏡の中の像」に表情などの違いがあったのではないかという指摘があったが、「憎しみ」を「僕」がどのような手段で感知したのかということについての描写は何もないため、両者の間で明確に表情が違ったのかどうかはあずかり知ることが出来ないのではないかと考える。

やがて奴の方の手が動き出した。

「やがて」とあることから、金縛りにあったように動かなかった時間がしばらくあったことが伺える。「奴」という呼び方から、鏡の中の像を「僕」が完全に『別の存在として認識し出したことがわかる。

右手の指先がゆっくりと顎に触れ、それから少しずつ、まるで虫みた

いに顔を這い上がっていた。

鏡の中の手がゆっくりと動いていく状況を細かく描写している。「まるで虫みたいに」や「這い上がって」という文から、得体のしれない気味の悪さや、自分の身体が自分ではないような感覚が印象付けられる。

気が付くと僕も同じことをしていた。

ゆっくりと手が動いていく状況を、「僕」は鏡の中の現象としてとらえていたのだということがわかる。この時点でようやく「僕」は、行動の支配権が自分ではなくあちら側に移ろうとしていることに気付く。

まるで僕の方が鏡の中の像であるみたいになさ。

「まるで」「みたいに」のここでの意味は、「ちょうど」や「あたかも」のような例示の副詞である。「僕」と「鏡の中の像」の立場が反転しつつあることを示している。

つまり奴の方が僕を支配しようとしていたんだね。

「僕の方が鏡の中の像であるみたいに」という前の文章をさらに言い換えている。「僕」という主体性を持った人間が、鏡の中の像と言う見た目だけが同じ、得体のしれないものにとつてかわられるという恐怖を感じている。

それにもかかわらず、現在の「僕」の語り口は、前文の「みたいにさ」と同様、「ね」で終わる軽いものである。この時の恐怖をもう気にはしていないように思える口調ではあるが、そうではないことが後々わかってくる。

僕はその時、最後の力を振り絞って大声を出した。

「最後の力」とあることから、「僕」がこの時点でほとんど「鏡の中の像」に支配されつつあったことがわかる。体の動きは支配されつつあったのであろう。ところで、「鏡」に映るものは外見と、身体の動きだけである。声は鏡には映らない。そこから、鏡の支配から逃れるためには声を出すしかなかったことが納得できる。

それから僕は鏡に向かって木刀を思い切り投げつけた。

右手は鏡の像が動かしていたことからわかる通り何も持っていない状況であつたため、おそらく木刀は左手に持つか左のわきにはさんだりなどしていたのではないか。木刀で鏡を叩き割るのではなく、「思い切り投げつけた」とあることから「僕」の焦りが伝わってくる。また、鏡と僕との間には距離があるのでないかということも考えられる。

僕は後も見ずに走って部屋に駆けこみ、ドアに鍵をかけて布団をかぶった。

「部屋」は用務員室のことであろう。「後も見ずに」という表現から「僕」がかなり怯えていたことがわかる。「鏡」から抜け出したもう一人の自分が追ってくるかもしれないという思いが拭えなかったのだろう。

プールの仕切り戸の音は夜明け前まで続いた。

「夜明け前まで続いた」ということがわかる、ということとは、「僕」が一晚中眠れなかったことを示している。

こういう話の結末ってわかると思うんだけど、もちろん鏡なんてはじめからなかったよ。

「こういう…わかると思うんだけど」という話し方から、わざとあつけなく、何でもないように話している様子が伺える。「こういう話」というのは、僕が冒頭に話していた「怖い話」の類型パターンでは大方このようなオチである、というニュアンスが含まれているのである。

「もちろん」と大前提があるように話している。ある種の「怖い話」の類型パターンの延長線上にあるものであるとして、不自然な鏡がそもそも存在しなかったのだということをすんなり納得させようとしている。

そんなのもともなかったんだよ。

短い文章でもう一度鏡がなかったことを繰り返している。「そんなの」という言い方には少々投げやりな響きが感じられる。

というわけで、僕は幽霊なんて見なかった。

「というわけで」という言い方で、「僕」がこの話を締めくくろうとしていることがわかる。しかし、「僕」はこの奇妙な話を披露してなお、「幽霊なんて見なかった」と主張している。「僕」は「鏡の中の像」を幽霊だとは認識していない。

僕が見たのは——ただの僕自身さ。

「——」を使うことで、「僕」の発言の最中に少し間があったような

臨場感を感じることが出来る。

でも僕はあの夜味わった恐怖だけはいまだに忘れることができないでいるんだ。

「恐怖だけ」の「だけ」という言葉で印象付けが行われている。

「いまだに忘れることができないでいる」という表現の「できないでいる」という部分、とりわけ「いる」という現在形を使用していることで、その時の恐怖がいまだに「僕」の中で消えないものであること、未だにその恐怖を抱えたままであることが伺える。

人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうか？

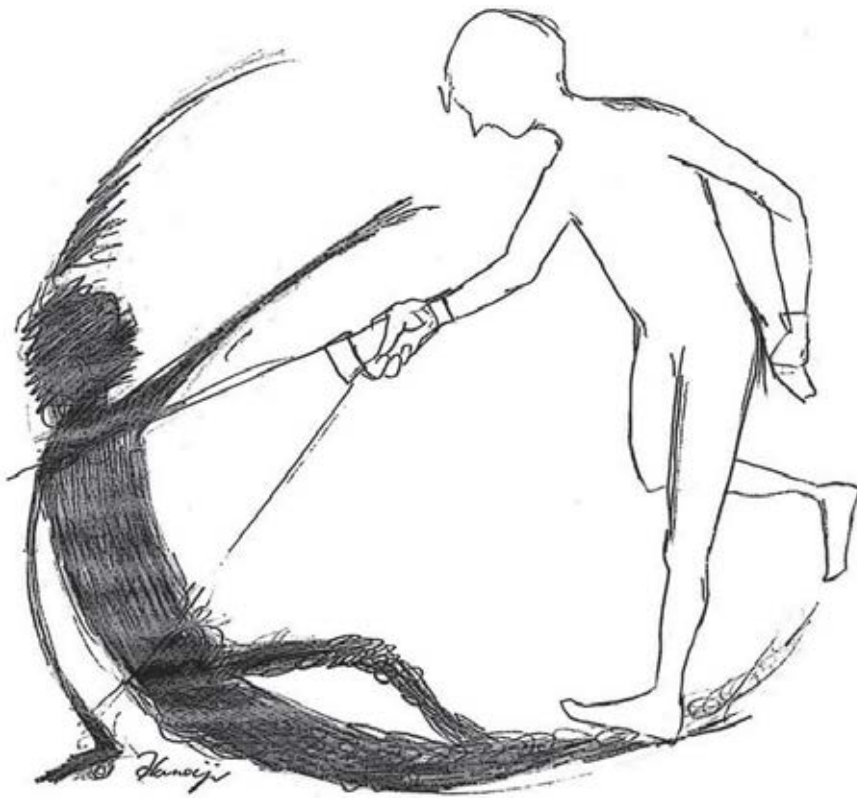
ね。

「僕」は幽霊を信じていない。超能力も持っていないと思っている。幽霊や不思議なものへの恐怖心は持っていない。「僕」にとつての恐怖は、「鏡」が突如現れたり、それが実際には存在していなかったことがわかったりするという奇妙な現象に対してのものではない。「鏡」の中に現れた自分自身、そしてそこから見取ってしまった自分自身への「憎しみ」に対しての恐怖なのである。

「あるだろうか」という文は、疑問形にはなっているが、「僕」の中ではすでに答えの出ているものである。「自分自身以上に怖いものはこの世にはない」という確信が「僕」にはあるのだ。会に参加する作中の人々に対してだけでなく、読者にも問いかけてきている。

ところで君たちはこの家に鏡が一枚もないことに気づいたかな。

「ところで」と「僕」は唐突に話題を変える。この「怖い体験談」



を語る会は「僕」の家で開催されている。「鏡」の体験により、自分自身の姿を映し出すことに恐怖を感じてしまった「僕」は、十年以上前から「鏡を見る」という行為そのものをすっぱりやめてしまったのである。あっさりとした、冗談めかした書き方ではあるが、それと相反するような「生活から鏡を排除する」という行為の特異さから、「僕」の感じた恐怖の大きさがうかがい知れる。

### 三 考察

#### (一) 特異な空間

この作品中で、「僕」が「心の底から怖い」体験をするのは、中学校の夜警をした時である。その時の「僕」のいた場所、時間、表現等に注目して、「僕」が自分自身に遭遇する際の、特異な空間を形作っているものについて考察する。

まず、プールの仕切り戸について。このプールの仕切り戸は、「僕」が午前三時の見回りに出る場面で「ひどく混乱した人間が首を振ったり肯(うなず)いたりするみたい」に、「すごく不規則」に「うん、うん、いや、うん、いや、いや、いや……」といったように開閉している。また、「僕」が自分自身に遭遇した後、夜が明けるのを待つまでもなく登場し、ここでも「うん、うん、いや、うん、いや、いや、いや……」と首を振っている。「すごく不規則」と前に記述しているにも関わらず、同じ「うん」「いや」という言葉の連続を取り入れたのには、特異な空間をその中に作り出すという意図があったからだと考える。実際、この文章は、「僕」が自分自身に会うという特異な体験をする前後に出てきている。また、このプールの仕切り戸の開閉する音は、その他の場面では「ばたんばたん」という表現がされており、この首を振る表現がされているのはこの二文だけである。

次に、街灯について。見回りの途中で鏡を発見した場面に「窓からほんの少しだけ街灯の光が入ってきて、その光は鏡の中にも及んでいた。」とある。しかし、この文章は前述にあることと全く矛盾している。前述に「もちろんまっ暗だよ。」「月が出ていれば少しは明かりが入っ



てくるけど、そうじゃなきゃまるで何も見えない。「もちろん月なんて出ていない」「ほんの時たま雲が切れても、すぐにまたまっ暗になってしまう。」とあるように、この日は台風が近く、懐中電灯が無ければ何も見えないくらいまっ暗だった。この暗さを五文にも渡って説明しているにもかかわらず、実は初めから街灯の光が鏡に及んでいたとは考えにくい。この街灯も、鏡と同様に、本当は無かったものとして捉えられるのではないか。特異な空間を作るものの一つだと言える。

最後に、場所について。「僕」が鏡の中の自分自身と遭遇する場所は玄関であり、出入り口。つまり内と外の狭間である。夜警をした中学校という場も、教師と生徒、大人と子どもとの狭間にあり、場所は境界を意識して設定されたのではないかと考えられる。また、本作品中で重要なキーポイントとなる鏡も、「僕」と「僕以外の僕」が出会ったように、境界としての役割を果たすと考えられる。この物語が「鏡」という題になっていることも含め、この作品は境界を意識した、特異な空間を作り出すものになっていると言える。

## (二)鏡が映しだしていたもの

まず、ここでの「鏡」の映し出すものの意味について。「鏡」が、「それは僕がそうあるべきではない形での僕」を映し出していたという事から、この作品中の「鏡」は、反対の物を映し出すものとして捉えられているという見方がある。一方で、外見は「僕」と同じため、ただ反対のものを映し出すと決めるのはどうかという見方もある。両方の立場をとって、外見は同じだが、内側は相反するものとして映し出す役割を持つという見方もあった。「鏡」がどう映しているか、グループ内でも意見が分かれた。また、鏡を生と死の境界として、見えていた

のは死した自分だとする意見もあった。しかし我々は、「僕」が死へ恐怖を覚えたというよりも、取って代わられること、自己のアイデンティティを失うことに恐怖を覚えていたのではないかと考える。

では、「僕」の様子について振り返りながら考察していく。「僕」は鏡を見ながら煙草を三回ほどふかした後で、急に、「それは僕がそうあるべきではない形での僕なんだ。」と感じ、そして鏡の中の「僕」からは、「相手が心の底から僕を憎んでいるってこと」だけを理解することが出来た。その後、その鏡の中の「僕」に支配されそうになる。

まず、「そうあるべきではない形での僕」とは何か。作品中で、「僕」が生きたのは六〇年代末の学生運動による紛争の盛んな時代であり、「僕」もまたその波に呑み込まれ、「そういうのが正しい生き方だと思つた。」一人だったとある。実際に肉体労働をしながら日本中をさまよひ、正しいと思う生き方をしていることから、「僕」の考えるそうあるべき形の僕とは、体制を打破しようとする「僕」の現在の生き方であると推測できる。つまり、鏡に現れた「そうあるべきではない形での僕」とは、「現体制の中で生きようとする僕」ととらえられる。

では、「相手が心の底から僕を憎んでいる」と「僕」が感じたとはどういうことか。

ここで、「僕」が鏡の中に見たのは、「僕以外の僕」である。しかし、私たちは、実際その「僕以外の僕」が存在したという視点からではなく、「僕」が僕以外の人間に見えたのはなぜかという視点から考察した。私たちは、「僕」の自分自身に対する憎しみが、鏡の中の像となって表れたのではないかと考える。

「僕」が反体制派の動きをしていたのは、「波に呑み込まれた」とあるように、流行にのった故の行動である。だから、「僕」は正しいと思

う生き方にむかって直進することに、心の奥底で少なからず疑問をもっていたはずだ。しかしその生き方を変えることもなく突き進んでいったがために、自分への疑問はふくらんでいった。そしてこの特異な空間の中で、ついにその自分に対する疑問が、自分の正反対の生き方をする鏡の中の「僕」となって、憎しみを持って眼前に現れたのではないか。

そして、その鏡の中の「僕」に支配されるという事は、現在の自分にとつてかわられるという事だ。それは自身のアイデンティティを失うという事を意味する。「僕」は、その恐怖から鏡を割って逃げ、三〇代になってからも、その体験が忘れられず、家に鏡を置けないのではないか。一方で、家の中が鏡だらけで、その中の自分と話しているのではないかというゾツとする意見も出た。

また、鏡を生と死の境界として、見えていたのは死した自分だとする意見もあった。しかし、冒頭で「何かの力によつてクロスするつていうタイプの話」を「僕」はしないと前置きしていることから、これは生死の境界ではないと考える。「僕」が死へ恐怖を覚えたというよりも、取つて代わられること、自己のアイデンティティを失うことに恐怖を覚えていたのではないか。